

『春と修羅』第二集 私註と考察（その四）「一八四 春」

木村 東吉

一 はじめに

『春と修羅』第二集（以下『第二集』と略記し、第一集、第三集についても、この例に従う）所収の作品について注釈し、考察していきたい。本稿は、賢治の詩的イーハトーヴ世界の構造と、その形成および変容過程の解明を企図し、進めている基礎作業の一部である。本稿では、「一八四 春」を取り上げる。

関連先行研究で、特にこの作品について注目したものはないが、簡単な注釈には、早いものに藤原嘉藤治の「春と修羅第二集註解」の語句注釈があり、後のものに中村稔の脚註がある。¹⁾

この作品は、「北上川は焚気を流しィ」「早池峯山巔」等とともに、一九二四年夏ごろ得た着想に基づいて製作され、「一八四 『春』変奏曲」「春 水星少女歌劇団」へと展開し、「花鳥図譜」構想中の一篇として位置づけられている点が注目される。「花鳥図譜」構想については別稿で考察するが、ただ（北上川は焚気を流しィ）の場合と同様、この作品も、「青森挽歌」等に原モチーフを持ち、これを明るくファンタジックな世界へと昇華している。²⁾

解釈は『第二集』「一八四 春」の定稿によって進める。関連作品および資料を整理しておけば、次の通りである。

まず、生前発表形「ワルツ第CZ号列車」〔貌〕三号 1925.9.15刊所載）「ワルツ第CZ号列車」（同鑑）八号 1926.10.1.刊所載）「一八四 春」（『第二集』所収 創作日付1924.8.22）とその下書稿を「一八四 春」系とし、次に「一八四 『春』変奏曲」（『第二集』所収 創作日付1924.8.22）と「一八四ノ変 『春』変奏曲」（『第三集』付録所収 創作日付1933.7.5）と、その下書稿を含めて『春』変奏曲」系とし、最後に「春 水星少女歌劇団」とその下書稿を「花鳥図譜」系とすることができる。展開・発展過程の大筋は「一八四 春」系→「一八四 『春』変奏曲」系→「花鳥図譜」系と見られる。素材や作品の持つトーン、印象は大きく変容しているが、作品の中心主題には、一貫したものがあある。後に述べるように「一八四 春」（『第二集』所収）の最終成立時期は、一九二八年一月以降であり、「一八四 『春』変奏曲」（『第二集』所収）が成立したのも一九二九年春以降である。

『第二集』収録の「一八四 春」は次の通り。（『校本 宮沢賢治全集』

『春と修羅』第二集 私註と考察（その四）「二八四 春」（木村）

による。行数を示す数字は、便宜のため、筆者が私に付した。以下の引用も同全集による。）

一八四 春

空気がぬるみ

沼には鷺百合の花が咲いた

むすめたちは

みなつややかな黒髪をすべらかし

あたらしい紺のペッティコートや

また春らしい水いろの上着

ブラットフォームの陸橋の段のところでは

赤縞のずぼんをはいた老樂長が

そんな工合だといふふう

楽譜を読んできかせてゐるし

山脈はけむりになつてほのかにながれ

鳥は燕麦のたねのやうに

いくかたまりもいくかたまりも過ぎ

青い蛇はきれいなねをひろげて

そらのひかりをとんで行く

ワルツ第〇二号の列車は

まだ向ふのぷりぷり顫ふ地平線に

その白いかたちを見せてゐない

一九二四・八・二二・

5

10

15

二 語句注釈

① 鷺百合

鷺草のこと。ラン科の湿地に自生する草花で、高さ30cm位。夏、鷺の飛ぶ姿に似た白い花をつける。水辺にたたずむ鳥のイメージを求めたの表現である。「ワルツ第〇二号列車」および下書稿八一Vで「水百合」とし、下書稿八一Vでは「百合」に「ばせう」とルビを付した後、消してある。鷺百合と水百合、あるいはミズバショウとは花の形も大きさも、まったく異なる別種の植物である。にもかかわらず、あえてこの改稿が行われていることからその意図が忖度される。

改稿の時期は、一九二八年一月以降使用されたとみられる「御大典記念手帳」三七頁に「△沼には水百合の花が咲いた」とあるから、それ以降であろう。

下書稿八一Vでは「爬虫がいつびき鳥に（な）って云々」「東の緊那羅衆は／天の上で青い銅鑼をたゝき」等の表現を挿入しようとしたところが、この手帳のメモの直前、三五・三六頁には、『疾中』の「胸はいま」の草稿メモがあり、それは「わたくしの胸は熱く／かなしい鹹湖になり／岸には幾里もまっ黒な／鱗木類の林がつく／わたくしは爬虫類が鳥に／変るまで／湧きつゞけて／ゐなければならぬのか」というものである。地質時代ジュラ期をイメージさせるこれと類似的表現は、「小岩井農場 パート四」にもある。改稿の背景として、これらのことを考慮すると、水百合を鷺百合とすることにより、水辺に生まれる鳥のイメージを置き、L14の「青い蛇はきれいなねをひろげて」といったファンタジックなイメージの展開を円滑にすること

を、考慮した改稿と解釈されよう。

② あたらしい紺のペッティコートや／また春らしい水いろの上着

一見、明るいイメージで捉えられる。しかし、後述する通り、この作品のモチーフには「青森挽歌」の一部と共通するところがある。このため、「水いろの上着」という装いには、「青森挽歌」で、「ギルちゃん青くてすきとほるやうだつたよ」とあることとの関連が注目される。「手紙 四」でも、死後蛙に変身した幼い妹のポーズが、兄のチュンセに「兄さんなぜあたいの青いおべ裂いたの」と言っているが、ここには明らかにトシの変身した姿をイメージさせるものがある。透き通るような青い服装と亡妹トシのイメージには、密接な近縁関係が認められるのである。

「オホーツク挽歌」にも、「緑青は水平線までうららかに延び／雲の累帯構造のつぎ目から／一きれのぞく天の青／強くもわたくしの胸は刺されてゐる／それらの二つの青いろは／どちらもとし子のもつてゐた特性だ」とある。ここでは「緑青」とあるけれども、要するに海と空との「二つの青いろ」を、作者は「とし子のもつてゐた特性」と見ている。ここに登場する「むすめたち」の「紺のペッティコート」と「水いろの上着」に、トシに連なるものとしての特性を見ることが自然であろう。

この時期の作者は、亡妹トシの生前の倅にこだわることをやめ、万人の中に遍在するトシ的なものを認め、愛そうとしている。「薙露青」にも、「声のいゝ製糸場の工女たちが／わたしをあざけるやうに歌って行けば／そのなかにわたくしの亡くなった妹の声が／たしかに二つも入ってゐる」としている例がある。⁽³⁾

『春と修羅』第二集 私註と考察(その四)「二八四 春」(木村)

③ プラットフォームの陸橋の段のところでは

この作品に、水辺の駅のイメージがあることが注目される。「青森挽歌」では、「水いろ川の水いろ駅」とある。

同時に、この駅は、完全な架空の幻想空間に存在するのでもなく、「春 水星少女歌劇団」では、近くに「セニヨリタス」という山があり、その山は「瓦斯をすこうし吐いてる」として、東岩手火山の幻想化表現と見られるところがある。地上の現実空間の上に、ほとんど重なる形で成立しているのが、幻想的賢治詩の特徴の一つである。

④ 赤縞のずぼんをはいた老楽長が

生前発表形「ワルツ第2号列車」(「貌」所載)に関連して、「貌」の編集者森佐一宛書簡(書簡番号210 1925. 8. 14付)で、「赤縞のズボン、をはいた、といふところは本統は 萎びて、黄いろな、老楽長 といふのです。読む人によつては萎びてといふことばですつかり気分をこわすかもしれませんがもしあなたが大丈夫とお考へでしたら勿論もとの手帖のまゝにねがひます」とある。

したがって、「赤縞のずぼんをはいた老楽長」とは、中村がいうように、「現実ばなれした賢治好みの設定で」「西洋風の情景が、お伽噺のような愉しき」を与えるところもあるが、その根底に、「青森挽歌」で「おれはその黄いろな服を着た隊長だ」と表現されたものと共通するところがあることも見落としてはならない。こうした改稿の背後には作者に「曲馬師のよごれてのびしも／ひきの荒縞ばかりかなしきはなし」(歌稿A 316)といったイメージがあったことが考えられる。

これらのことを考慮するなら、ここには、ピエロ的存在が持つ両義性、つまり、明暗二つの世界に関わる存在としての意味が考えられる

べきであろう。

⑤ 山脈はけむりになってほのかにながれ

背景に、ぼかされている部分と焦点化されている部分があることが注目される。ファンタジックな情景を浮き上がらせる効果を狙った表現であろう。

⑥ 鳥は燕麦のたねのやうに／いくかたまりもいくかたまりも過ぎ

「燕麦のたね」のやうな鳥の群の通過は、「青森挽歌」のギルちゃん
とナーガラの挿話の部分にも、描かれている。「(鳥がね たくさんた
ねまきのときのやうに／ばあつと空を通つたの)」とあるのがそれだ
である。賢治詩には、空をよこぎる鳥の群に、不安や心の影などの特殊
な心象が結びついたものが多いのだが、これもその例で、中でも、鳥
の群の通過を、種子撒きのイメージで捉えているのは、この二例のみ
である。『青森挽歌』との関連の強さを感じさせる表現である。

⑦ 青い蛇はきれいなねをひろげて／そらのひかりをとんで行く

さきにも述べたように、下書稿△二▽にも、「爬虫がいつびき鳥にな
つて／キーンと／そらへとびだすたんびに」とあつて、蛇の変身がイ
メージされている。「二八四 『春』変奏曲」では、これが「ドラゴ
ン」に、「春 水星少女歌劇団」では、「ドラゴン」へと変貌している。

作者には、空にひらめくものを捉える幻視、あるいはそれに近い体
験が早くからあつたらしい。「うつろとも雲ともわかぬ青光り陰色の丘
の肩にのぞめり」(歌稿A 46)は、そうした体験を詠んだものであろう。
こうした幻視体験が、ここでは変身する青い蛇のイメージとなつたと
見られる。

その背景には、『青森挽歌』のギルちゃんとナーガラの幻想等が考え

られる。この「ギルちゃん」と「ナーガラ」について、藤原嘉藤治・
草野心平は「ギルちゃん」とは「蛙をたとえていったもの」とし、ナ
ーガラについては「梵語でナーガは竜のこと」で、「ここでは蛇をナー
ガラと呼んだらしい」とする。⁽⁴⁾

また、作者は、「そらいろのへび」「青い蛇」に特殊な関心を持って
おり、「そらいろのへびを見しこそかなしけれ学校の春の遠足なりし
が」(歌稿A 17)「つゝましき午食の鯛を装へるはたしかに蛇の青き
皮なり(歌稿A 105)」といった作品がある。後者は、一見不快な食事の
印象を詠んだものでもあるが、これをもし『手紙 一』にある
龍の話、知つての作品と見れば、解釈もかなり変わってくる。『手紙
一』の話とは、昔、龍が、以後すべてのものを悩ませないと誓いを立
てて眠ると、るり色や金色に輝く蛇になった。このため、獵師に皮を
剥がれ、さらには蛆虫に肉を食べられる。しかし、龍はこれに耐えて
死ぬが、やがて天上に生まれ、後には釈迦になり、肉を食べた蛆虫ら
も、皆仏弟子となつたという説話である。この説話を踏まえて105の歌
を見れば、これもいわば己に仏縁を感じている作品ということにな
る。⁽⁵⁾ いずれにしても、「青い蛇」と龍との関係は、不可分のものである
ようである。

これらを総合して見るとき、「二八四 春」でも、蛇の背後に変身し
たトシのイメージがあつたわけだが、同時に、ここには、いわば蛇の
「飛騰」があるわけで、悲傷が明るいファンタジーへと昇華された経
過を見ることができるといえる。

⑧ ぶりぶり顫ふ地平線

L 11の「山脈はけむりになってほのかにながれ」とともに、幻想空

間の周辺を形成しているわけであるが、これがぼかされていることで、空間の自然さをあたえると同時に、この顛えによって幻想の肉感性を表現している。

⑨ ワルツ第〇号の列車

「一八四 『春』変奏曲」では、「ベーリング行XZ号の列車」とされている。L17にこの列車は「その白いかたちを見せていない」とある。幻想上の列車だが、様々な列車が登場する賢治詩の中でも、白い電車が登場するのはここだけである。

プラットホームで列車を待っているのは、赤縞のずぼんをはいた老楽長と水いろの上着を着た娘らである。待たれる列車が、なぜ「ワルツ第〇号」なのか、「第〇号」の意味は不明だが、季節の春と、ワルツとを結び付けたのであろうか。『銀河鉄道の夜』では、列車はやがて『新世界交響曲』のスケルツォのリズムに乗るが、最初はジョバンニが、りんどうの花を見つけると「ぼく、飛下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせやうか」というほどの速さで走っている。ワルツの名に相応しい列車も想定されたのであろう。

「一八四ノ変 『春』変奏曲」の「ベーリング行XZ号の列車」では「いま触媒の白金を噴いて、／線路に沿った黄いろな草地のカーペットを／ぶすぶす焼き込みながら／挺々として走って来ます」となっており、イメージを変えている。

三 構成

作品の表面だけをなぞれば、構造は単純で、春になって驚草の咲く沼辺の駅に、春らしい水いろの上着を着た娘たちが集り、プラットフォー

『春と修羅』第二集 私註と考察(その四)「一八四 春」(木村)

ムの陸橋の段のところで、赤縞のずぼんをはいた老楽長が、楽譜を読んで聞かせている。

背後には煙のようにかすむ山脈が見え、不安や心の影を象徴するように群を成す鳥が飛び過ぎる中を、青い蛇が翅をひろげて空へ上ってゆく。まだ姿を現わさないワルツ第〇号の列車を待って、遠くに目を遣れば、陽炎に揺れる地平線が望まれる。いくらかの翳りはある。が、全体としてファンタジックな明るい情景である。

語句注釈の項でも触れたように、この作品の根底に「青森挽歌」の一部と共通するモチーフがあることを知ってこれを見ると、翳りの部分の持つ意味が鮮明になり、ただ明るいただけのものではないものが見えてくる。共通するモチーフをもつ「青森挽歌」の、その部分を指摘すれば、次の個所である。

「青森挽歌」(抜粋)

水いろ川の水いろ駅

(おそろしいあの水いろの空虚なのだ)

(中略)

今日のひるすぎなら

けはしく光る雲のしたで

まつたくおれたちはあの重い赤いポンプを

ばかりのやうに引っぱたりついたりした

おれはその黄いろな服を着た隊長だ

だから睡いのはしかたない

(中略)

あいつはこんなさびしい停車場を
たつたひとりで通つていつたらうか

55

どこへ行くともわからないその方向を

どの種類の世界へはいるともしれないそのみちを
たつたひとりでさびしくあるいて行つたらうか

(草や沼やです)

60

一本の木もです)

(ギルちゃんまつさをになつてすわつてゐたよ)

(こおんなにして眼は大きくあいてたけど)

ほくたちのことはまるでみえないやうだつたよ)

(ナーガラがね 眼ををぢつとこおんなに赤くして

だんだん環をちいさくしたよ こおんなに)

65

(し 環をお切り そら 手を出して)

(ギルちゃん青くてすぎとほるやうだつたよ)

(鳥がね たくさんたねまきのときのやうに

ばあつと空を通つたの

70

でもギルちゃんだまつてゐたよ)

作品の情緒的トーンは、まったく異なるけれども、イメージされている幻想空間は、基本的に共通の構造を持つ。水辺の駅に疲れた「黄いろな服を着た隊長」あるいは「萎びて黄いろな老楽長」を原イメージとする「赤縞のずぼんをはいた老楽長」がいて、トシのイメージを持つものについて語らう者がいたり、あるいはトシのイメージを持つ者が語らう合っており、空をよぎる鳥も「たくさんたねまきのときのやうに」ある

いは「燕麦のたねのやうに／いくかたまりもいくかたまりも過ぎ」る。「青森挽歌」で、「あいつはこんなさびしい停車場を／たつたひとりで通つていつたらうか」とされていたものが、「一八四 春」では「青い蛇はきれいなねをひろげて／そらのひかりをとんで行く」形で捉えられている。時間的に昼と夜のずれがあり、素材の変容はあるが、幻想空間の構造に大きな違いはない。

こうした見方から、改めて両者を比較して見ると、「一八四 春」の明るさが、一層印象的だが、それは、ピエロ的イメージを持つ楽長とその心を写すかのように、鳥の群も断続的に空をよぎる中を、「青い蛇」が「きれいにはねをひろげて」「飛騰」していくのと呼応している。この影と光の関係を、いくらか解りにくいものにしたのは、作者が「萎びて黄いろな老楽長」を含めたいと思いつながら、全体の印象が暗くなることを恐れて「赤縞のずぼんをはいた老楽長」としたこと、かわつているかもしれない。これが色彩的に明るいため、飛び過ぎる鳥の影に込められた不安の影と微妙に内面的な響き合いを持つていること、そして全体としては、悲傷をそれとして踏まえつつ明るいファンタジーに昇華しているところを見えにくくしてしまつてゐる点も無くはないからである。

「一八四 『春』変奏曲」「春 水星少女歌劇団」への展開に際し、作者はこの点をどのようにしているであろうか。次に簡単に見ておきたい。

四 「一八四 『春』変奏曲」「春 水星少女歌劇団」への展開

「一八四 春」から「一八四 『春』変奏曲」「春 水星少女歌劇団」への展開を見ると、水辺の駅で列車を待つている若い女性の集団と、これを取り仕切つている楽長らの一情景を描いていることでは、三作品が

共通している。また、悲傷の昇華という中心主題は一貫しているが、しかし、描かれた情景や印象にはかなりの違いがあり、変化した部分や、付加された部分も大きい。

「一八四 『春』変奏曲」は、先述の通り、『第二集』『第三集』に収録されている。しかし、『第二集』所収形は、未完の色合いが強く、作者が『第二集』編纂のための作品を選択したマークかとされる原稿の題名の上の△印等のマークも、これにはない。⁶⁾ また、製作日付も「一八四 春」と同日になってはいるが、その草稿に使われた用紙が「東北砕石工場花巻出張所用箋」であるから、実際の製作日は、一九二九年春以降である。これらの点からして、作品としては『第三集』所収形で見べきであろうし、その成立期も、『第三集』付録として収録された時の日付一九三三・七・五の方が実際の日付に近いのであろう。したがってこれは、最晩年の作品ということになる。

内容は、「さつきのドラゴが何か悪気を吐いた」後で、時間的には「一八四 春」に続く形になる。「星葉木」の胞子をのどにひっかけたギルドちゃん、笑いに苦しむのを、楽長が助ける話を中心になっている。「星葉木」というのも、不可解な植物だが、胞子植物で、「もう絶滅してゐる筈」とあるから、「胸はいま」における「鹹湖」のほとりに茂っていた「鱗木」をイメージさせる。その場合、この胞子をもたらしただものが、「鹹湖」から飛び立って来た「ドラゴ」であつても不自然ではない。

その胞子にのどをくすぐられて、笑いに苦しむギルドちゃんという娘を、楽長がぎわよく処置して、その場の問題が解決し、ほっと安堵するというのが、この作品の中心的な出来ごとだが、情景は全体として日常生活の平凡さでまとめてある。ここではもはや、悲傷の翳りも、楽長

『春と修羅』第二集 私註と考察(その四)「一八四 春」(木村)

のものではなくなっている。これに対応して、断続的に飛び過ぎる鳥の群もない。「ドラゴ」が登場すれば、当然、鷲百台も姿を消している。

反面影の部分を担当ものとして、「星葉木」の胞子のために笑いに苦しむギルドちゃんが登場し、背景には、「悪気を吐く」「ドラゴ」や「いま触媒の白金を噴いて、／線路に沿った黄いろな草地のカーペットを／ぶすぶす焼き込みながら／挺々として走って来」る列車が現われて、人間関係と背景が、大きく変化している。この気ぜわしい列車には、内面に籠るものが噴き出しているかにも見えるところがある。

「春 水星少女歌劇団」では、楽長が「座長」^{マスター}「勳爵士」^{ドクトル}「強いジョニー」と呼ばれ、「赤縞のズボンをはいた老楽長」や「萎びて黄いろな老楽長」から大きく変貌している。同時に、「龍」にも「あの龍、^{ドラゴン}翅が何だかびつこだわ」と捉えられて、悲傷の影を残す側面と、松の若芽を食べすぎても香油を吐くものとされ、「悪気を吐く」「ドラゴ」から大きく変貌する側面とが見られる。「きれいなはねをひろげて」「飛騰」する「青い蛇」からすると、イメージの成長に著しいものがあるのだが、これと併せて、作者は作品の最後に「ジョニーは向ふへ歩いて行き、向ふの小さな泥洲では、ぼうぼうと立つ白い湯気のなかを、墓がつるんで這つてゐます」と書き添えている。「泥洲で」「立つ白い湯気のなかを」「つるんで這う」^う「墓」から、香油を吐く「龍」までの転生の経緯が、「ジョニー」の目で捉え直されている形である。

加えて「春 水星少女歌劇団」では、背景の美化が著しい。「一八四 春」で「山脈はけむりになってほのかにながれ」とされていたところが、「(水いろのとこ何でせう)／(谷がかすんでゐるんだよ／おゝ燃え燃ゆるセニヨリタス／ながもすそなる水いろと銀なる鬘をととのへよ」と歌われ

『春と修羅』第二集 私註と考察(その四)「一八四 春」(木村)

ている。「空気がぬるみ／沼には鷺百合の花が咲いた」とされていたところも、「鷺百合」は姿を消し、「沼地はプラットフォームの東、いろいろな花の爵やカップが、代る代る敵めしい蓋を開けて、青や黄いろの花粉を噴くと、それはどどん沼に落ちて渦になったり糸になったり株の間を滑ってきます」と、はなやかに活力に満ちた情景として描かれている。こうして美化された自然を背景に、営まれる生き物の悠久の転生のドラマを、作者は描こうとしたのであろう。少女達が「ヨハンネス！ ヨハンネス！ とはにかはらじを／ヨハンネス！ヨハンネス！ とはにかはらじを……」と歌う歌声には、世界、あるいは宇宙に対する賛歌の色合いが強い。「ヨハンネス」とは東岩手火山の幻想的聖化表現らしい「セニヨリタス」の山頂に住むものとされ、聖的存在のイメージがある。

「一八四 『春』変奏曲」に比べても、一層明るく、ほとんど輝く世界が描かれているのだが、これが「青森挽歌」の個人的悲傷から出発していたことを思う時、びつこな翅を持つ龍として、個人の悲傷をそれとして引き継ぎつつ、作者がこれを、よく宇宙的次元のドラマの中で捉え直し、明るいファンタジーへと昇華していることが理解される。

なお、「春 水星少女歌劇団」には、「花鳥図譜 五月 ファンタジー／水星少女歌劇団一行」の題名を付した下書稿があることから、これが「花鳥図譜」構想の中の一編であったことが判明する。「花鳥図譜」構想の全体像とその成立過程、及びその中でのこの作品の位置については、別に考察するが、「一八四 春」の創作意図に関連して気がかりなのは、「北上川は発気を流しィ」「早池峯山巔」とともに、一九二四年夏ごろに着想を得たこれらの作品群がいずれも、「花鳥図譜」構想の中に組み込まれている点である。「花鳥図譜」構想として形を整えるのは、晩年のこと

である。しかし、一九二四年夏ごろには、作者にトシとの死別の悲傷をファンタジーに昇華しようと思図する作品が目立ち、これらを、いずれも、更に発展させて、作者は「花鳥図譜」構想に組み込んでいる。ここに、この作品で作者が意図したのも、自ら、見えてくるようである。

註1 藤原嘉藤治「春と修羅第二集註解」(宮沢賢治研究)5・6合併号昭一一・

一二)中村稔『日本の詩歌18宮沢賢治』(中公文庫 昭四九・一〇)

2 拙稿『春と修羅』第二集 私註と考察(その三)「北上川は発気をながしィ」(島根大学教育学部紀要八人文・社会科学V)第22巻1第1号 昭六三・二〇

参照

3 拙稿『春と修羅』第二集 私註と考察(その二)『薤露青』(島根大学教育学部紀要八人文・社会科学V)第21巻 昭六二・一二) 参照

4 註1および、草野心平編『宮沢賢治詩集』(新潮文庫 昭四四・四)

5 この話を、賢治が何によって、何時の時点で知ったかが歌稿の解釈ともからんで問題になるが、類話は、『国訳一切経』本縁部、菩薩本生鬘論卷第三に「慈心龍王消伏怨害縁起第七」として「菩薩本縁経」巻の下に、「龍品第八」等として見られる。説教の場などを通して、早くから知っていた可能性は、充分あるであろう。

6 杉浦静「宮沢賢治『春と修羅』第二集の構想 試論」(日本文学)一九八五・

一一) 参照

なお、二校段階で、入沢康夫「宮沢賢治と音楽 ワルツ第CZ号列車」(『Fmfan』四一九号昭六〇・二)の存在を知った。参照すべきことも含まれるのだが、今はこのままとしたい。